

<b>1 学校教育目標</b> 夢の実現のために主体的に行動できる生徒の育成 ～生徒・保護者・地域から信頼される学校をめざして～	<b>2 本年度の重点目標</b> ①主体的・対話的で深い学びを促す活動を中心とした授業実践と授業と家庭学習のつながりを深める工夫による学力向上 ②自己肯定感・自己有用感を高める生徒指導の充実及び共感的理解を基盤とした教育相談の充実 ③信頼される学校づくり
--	---

達成度 A: ほぼ達成できた  
B: 概ね達成できた  
C: やや不十分である  
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

**3 目標・評価**  
①学力の向上(ひとりひとりの学びを支える授業づくりの実践と家庭学習の手引きの活用)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	主体的・対話的で深い学びを促す活動を中心とした授業づくりの実践ができたか。	・授業研究会を2回実施(6授業)及び授業参観ウィークを設定し、授業力の向上を図る。 ・先生は、分かりやすい授業になるようにいろいろ工夫していると回答する生徒が80%を上回る。	・2分前着席、立腰一礼から始まる規律ある授業の徹底を図る。 ・ともに学び合う授業づくりの実践に取り組む。 ・本時のめあての提示、授業の流れの提示し、見通しを持った授業展開と振り返りを行う。 ・UDの視点から板書の工夫の徹底を図る。 ・主体的・対話的で深い学びを促す活動を中心とした学習形態の工夫に取り組む。 ・校内研究授業の充実を図る。	A	授業研究会や参観ウィークや授業研究会に工夫を加え、主体的に参加し相互に意見を交換した。結果として教科を越えた意見の交流ができた。 12月の生徒アンケートでも「集中して授業を受けている」、「授業中は学習の目的を意識して学習している」など、5項目すべてで90%を超えた。また県学習状況調査でも、1年生が県平均を上回り、2年生でも1年の学力を維持する結果が出ており、近年の学習課題を改善した成果が見られた。	学習指導要領が目指す学びを実現するために、さらに多様な言語活動を研究実践する必要がある。そのために研究授業や授業公開の取組みを、形態に工夫を加えながらも継続し、全体の授業を公開性を高めながら、個々の授業の関連性を意識し指導の一体化を目指す。そのために校内研究のさらなる充実を図る。 生徒アンケートについては、生徒の自己評価をさらに分析できるように項目を改定したので、継続しながら経年変化を読み取り、生徒の姿や指導内容の評価を分析する一助とした。
			家庭学習の手引きを活用できたか。	・家庭学習の時間を1時間以上とすることができている生徒が、70%を上回る。	・「家庭学習の手引き」の作成と授業と家庭学習のつながりを深める工夫に取り組む。	B	家庭学習の時間を1時間以上とすることができていると回答した生徒は62.5%で、目標に達することができなかった。しかし、徐々に家庭学習に取り組む習慣が身につけてきている。
教育活動	●志を高める教育	・キャリア教育の推進を図ることができたか	・中学校3年間を通して一貫した進路指導を計画する。 ・第1志望への進学90パーセント以上を目指す。	・進路決定に向けて具体的にわかりやすい情報を提供する。 ・高等教育機関訪問し、講義の体験・見学、学生との交流を図る。	A	1年時は「職業調べ」、2年時は「高校調べ」「職場体験学習」「先輩に学ぶ」、3年時は修学旅行で大学を訪問し、講義の体験や学生との自主研修を行った。このよう3年間を通したキャリア教育が実践できた。また、3年生は第1志望へ、ほぼ進学を決定できた。 課題として、生徒が自分の適性を自己分析することが難しいということが挙げられる。そのため、与えられた情報の取捨選択ができず、情報過多になり活かしきれないことも多い。	生徒が自分の適性を知るために、職業レディネステストやPASカード等に取り組みさせることも方法の一つである。そうすることで生徒一人一人の目標がより明確になり、キャリア教育も効果的に実践できると思われる。また、情報に関しては、そのまま与えるのではなく、生徒を見据えた上で適宜選択する必要がある。
教育活動	○特別支援教育・UD教育の推進	・ひとりひとりの学びを支え、ともに学び合う集団づくり、学習習慣づくりができたか	・学校では友だちと楽しく付き合うことができていると回答する生徒が90%を上回る。	・UD教育を推進し、教室環境整備の呼びかけと定期点検を実施する。 ・特別支援教育、UD教育に関する職員研修を実施し、職員の意識と指導力の向上を図る。 ・個別の支援計画の共通理解を図り、個に応じた支援を行う。	B	学校では友だちと楽しく付き合うことができていると回答する生徒が91.7%であった。 UD教育については、研修で確認を行い、教室環境整備を同じ視点で行うことができた。	講師として専門家を招き、特別支援教育に関する研修を行い、意識改革と指導力の向上を図る。 生徒の状況について、関わりの深い職員同士で定期的に情報共有を図り、より良い支援について協議し、実践する。

②生徒指導・教育相談の充実(自己肯定感を高める生徒指導、不登校・いじめの未然防止)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生徒指導	自己肯定感・自己有用感を高める生徒指導の充実を図ることができたか	・この学校でたくさんのことを学び成長していると感じる生徒が80%を上回る。	・職員の共通理解によるルール指導の徹底を図る。 ・「出番」、「役割」、「承認」を大切に、自己肯定感・自己有用感を高める。 ・生徒会活動、ボランティア活動を充実する。	B	学校生活の約束事や自転車通学のルールなどを職員間で時々、共通理解することができた。生徒を中心とした約束事やルールを守る取り組みが増えてきた。アンケート結果では、「先生はあいさつや挨拶・服装など、生活面に関することをきちんと指導している。」と評価している生徒は89%であり、「学校では、友達と楽しく付き合うことができている」「生徒は、91%を超えている。生徒会主催のボランティア活動も活発に行われた。また、毎月実施している自己評価アンケートを行い、自己評価や他者評価の結果を提示することで、自己肯定感を高める一助となった。更に、体育大会及び文化発表会を生徒主体の行事計画を形式にした上でたくさんの生徒の活躍が見られた。	「先生は、自分のことを理解してくれていると感じている」生徒が66%にとどまり、教師の「気軽に相談できるような雰囲気づくり、声かけの心がけ」についての、自己評価100%との格差が大きい。教師の生徒理解に対する意識改革とともに研修等による相談技術の向上・充実により信頼関係を築いていく必要がある。「この学校でたくさんのことを学び成長している」と回答した生徒は81%であった。今行っている取り組みを生徒主体にできるものはしていく必要がある。
教育活動	●心の教育	・豊かな心の育成を図ることができたか	・年間目標の取り組みにより、内面の成長を図り、自己肯定感を育む。 ・あいさつ運動やスリッパ並べなどボランティア活動に積極的に参加できていると回答する生徒が70%を上回る。	・年間目標の意義について、周知徹底を図るため生徒集会及び職員研修を行う。 ・あいさつ運動やスリッパ並べなどボランティア活動に積極的に参加できる心と自己肯定感・自己有用感を高める。	C	年度当初に本校における年間目標の取り組み方について職員研修、種別会を重ねた。生徒にも全校、学年別と集会で周知を図った。アンケートにおいても年間目標が自分の成長につながっていると感じている生徒が88%であった。しかし、周知の徹底はまだまだである。本来の本来の意義を再確認する必要がある。また、日々の生活の中で実践する必要がある。また、日々の生活の中で実践する必要がある。また、日々の生活の中で実践する必要がある。	・年間目標の取り組みについて職員の理解を深める必要がある。校内での職員研修の充実、資料の共有、県外出張への積極的な参加をし、臨場指導できる職員の増加を図る。それにより、生徒の年間への意識を深化させることができる。また、自分や他者への思いやりを大切にすることができると思われる。生徒会など協力し、ボランティア活動の機会の確保、日常における些細な行動に対するお礼メッセージの実施など承認欲求を満たすことで生徒の成長につなげる。
教育活動	●いじめの問題への対応	・いじめの未然防止、早期発見、早期対応及び再発防止を図ることができたか	・ひとりひとりの学びを支える授業、居心地のよい学級づくり(集団づくり)によるいじめの未然防止を図る。 ・教育相談の充実を図る。	・QUアンケートを活用し、居心地のよい学級づくりに生かす。 ・教育相談部会で共通理解を図るとともに関係機関との連携を深める。 ・ネットいじめ防止及び情報モラル教育に関する講演会を実施する。	A	毎月の生活アンケートや教育相談活動を通して、生徒の異変にいち早く気づき、早期解決に努めた。いじめに対する認識を再確認するために、集会や教育相談部会で、日頃の生活態度を共有した。 ・QUの分析で明らかになった気になる生徒に配慮した学級経営に努めた。また、毎週の教育相談部会では情報の共有や関係機関との連携を図ることができた。 ・専任の保護者に対して、SNS等に関する講演会を行った。生徒に対してSNS等に関するアンケートを行い、その結果を生徒指導や学校便りなどで知らせ、注意喚起することができた。 ・保護士によるいじめ予防授業を3年生に実施した。「悩みを先生やSICに相談しやすい」と肯定的に捉えた生徒は44%と高かったが昨年の30%より向上している。 ・教室へ入れない生徒や不登校傾向の生徒ら別室教室の設置を準備し生活支援員が実施できたため、9名の生徒の安定した登校につながっている。	・定期的な生活アンケート実施を今後継続し、より正確な実態を把握する。また、生徒や家庭の状況が多様化してきていることに対応できるようにするために、生徒・家庭に関するさまざまな情報の共有と対応策の協議・実践を更に充実させていく。そのためには、諸関係機関との連携は不可欠であり、必要に応じて積極的に関わっていくこととする。 ・新入生の保護者向けのSNS等に関する講演会を継続し、生徒向けにも講演を実施する。また、SNS等に関する授業も行って。更に、SNS等に関するトラブルに対する啓発を定期的に行う。 ・保護士によるいじめ防止授業を継続したい。 ・生徒が悩みを相談できるよう、教育相談の充実を図るための職員研修を実施する。相談内容によっては、SICやSSW等との連携を動めていく。

③開かれた学校づくり

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	・保護者、地域との連携の強化を図ることができたか	・学校情報の発信に努める。 ・学校行事への保護者・地域の方々の参加を昨年度より増加させる。 ・地域行事や委員会への生徒・職員の参加を昨年度より増加させる。	・学校便りをはじめ、各種便りの発行、ホームページの更新をする。 ・地域の会合等へ積極的に参加し、中学校の現状等を伝える。 ・教職員がPTAや地域活動の意義や効果を理解し、積極的に参加を促す。 ・地域行事への生徒の積極的な参加を促す。	B	・学校のホームページは適宜更新できた。また、学校便りをはじめ、学年通信や学級通信、保健衛生・図書便りなどを定期的に発行し、情報発信に努めた。その結果、情報発信について昨年度同様の73.4%の評価を得ることができた。 ・授業参加や保護者会への出席率を上げることが今後の課題である。	・来年度も定期的に情報を発信できるように、積極的に情報の共有・発信を行っていく。 ・授業参加の出席率を高めるため、時期や曜日を協議する。出席率の高かった体育大会や文化発表会も本年度同様、日曜日に設定したいと考えている。 ・学校と地域とで教育目標の共有化ができるよう手立てを協議していく。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	教職員の連携促進ができたか	・学校運営を組織的に進め、業務の効率化と分散化を図ることによって、質の高い業務内容を目指すし、個人負担を軽減させる。	・企画委員会を中心に、行事・企画を精選し学年や教科などが組織的に活動しやすい、環境を作る。また、各セクション間の連絡を密にすることによってさらに連携を強化する。	B	・学年行事を中心に内容のスリム化を図ることができた。 ・テストの試験監督を副担任が中心となって行い、担任が通知表の作成にあたった。 ・家庭を訪問する際は複数で行い、組織として指導にあたった。	・定時退勤日の再確認と徹底。 ・行事終了後の振り返りと、次年度に向けて、効率化に向けた改善策を検討し、共有する。
教育活動	○部活動の充実	・明るく充実した学校生活を送ることができたか	・スポーツ、文化活動に親しみ、技能を身につけ生涯教育の基礎づくりを図る。 ・健康な体と粘り強い精神力を養う。 ・公正に行動し、規則を守ろうとする気持ちを育成する。 ・異年齢間のつながりを大切にするとともに目上の人を敬う心を育てる。	・各部で開催している部活動保護者会や、部活動の意義について周知徹底を図る。 ・部活動運営方針による適正な部活動運営に努める。 ・感動を共有できるよう、臨場指導を心がける。 ・あいさつ、返事、礼儀、感謝の心など部活動で培われる人間性を大切に、光り輝く生徒を育成する。 ・学校生活を改善し、学校の中心的存在となるよう支援する。	B	・部活動休業日等毎月調査、報告をしていくことで、メリハリのある部活動ができている。 ・中体連(夏季大会・新人戦)の結果をみると、技能を身につけ、体力・精神力の向上に繋がっている。柔道は九州大会、個人で全国大会に出場し、合宿部も全国大会出場など、地域の注目度も上がっている。 ・朝のあいさつ運動や朝の清掃など進んで行っている。下校時刻もほとんど守っている。 ・友人間のトラブルや異学年とのトラブルはまだあるので、目標の持たせ方を再考する。	・今年度引き続き、スポーツトレーナーを導入し、健康な体づくりとメンタル面の強化を図る。 ・部活動休業日の徹底を継続する。 ・部活動指導員を心掛ける。 ・保護者との連携を図る。(連携を密にし、指導方法等も説明し、理解してもらう) ・部活動での生徒の頑張りが、気になるところ。友人関係などに教員同士の連携も密に行っていく。

**4 本年度のまとめ・次年度の取組**  
昨年度と比較においては概ね向上し、本年度の教育目標と重点目標を念頭に置いた教育活動が展開されていると考える。生徒は「先生はわかりやすい授業になるようにいろいろ工夫している」と86.8%が答え、昨年より10.5%向上している。今年度は、授業と家庭学習の効果的なつながりをテーマとして研究を進めてきたが、十分に浸透させることができなかった。来年度はさらに強化したい。授業中の「学び合い」は積極的に取り組んでおり、生徒同士の人間関係もよくなっている。生徒は「先生は生徒からの相談に乗りアドバイスや指導をしている」と70.1%であり、昨年より11.2%向上し、「生徒が悩みやすいように共感的理解を心がけている」と答えたと96.8%の教師側の実践が反映されている。「この学校でたくさんのことを学び、成長している」と答えた生徒は81.4% (昨年より9.6%向上)、保護者は82.4% (昨年より4.5%向上) であり、一人ひとりの個に応じた指導の成果であると考えられる。今後開発的・積極的な生徒指導に努めるとともに、教育公務員としての自覚ある言動を常に心がけ、生徒の自己肯定感、有用感を醸成しつつ、安全、安心で、支持的雰囲気のある学級経営を目指していきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目